連載……島からのことづて……6（最終回）

越の国巡礼

幕末維新長州僧の足跡をたどる旅

安渓遊地・安渓貴子

はじめに

この三十五年間、私たちは黒潮あらう島々の旅を続けてきました。それは、南の辺境からの視点で日本を、そしてアジアを見なおしたいという願いからでした。最近の五年間は、京都の地球研での日本列島の人と自然の歴史の研究プロジェクトで、幕末に薩摩藩が倒幕をなしえた軍事力の経済的基盤が、奄美沖縄の人々の大きな犠牲の上に築かれたことを知りました（とくに、統計書とソテツ食の研究を通して）。

薩摩藩とともに明治維新をなしとげた長州藩は、西南戦争で薩摩が脱落したあとは近代日本をかたちづくる中心勢力となりました。そこに私たちは三十年来、居を定めています。辺境から地方を見て、さらに地方から中央を見る視点がほしいと思います。

維新への貢献度では吉田松陰（一八三〇～一八五九）の知名度が高く、萩には松陰先生の弟子達の「松門神社」さえ建立されています。しかし、五十年にわたって近代真宗史の研究を進めてこられた、児玉識（しき）水産大学校名誉教授は、山口を震源とする近代政治史の中で真宗僧の果たしたきわめて大きな役割が忘れ去られている、と警鐘を鳴らしています（児玉、二〇一〇、二四九～二五一頁）。

吉田松陰との関係だけを見ても、外国からの侵略を防ぐことの必要性を民衆に圧倒的な説得力で訴えて松陰を感服させた僧・月性（一八一七～一八五八）がいます。（発音が同じためによく混同される月照（一八一三～一八五八）は、米国との条約締結をむりやり進めて、反対する勢力を粛清した安政の大獄で京都を追われ、西郷隆盛（一八二八～一八七七）と錦江湾で入水して死んだ別人です）。もう一人は、聾唖の真宗僧・宇都宮黙霖（一八二四～一八九七）です。彼は安芸の人で松陰と手紙を交わし、幕府を諫めようという立場であった松陰を論破して倒幕論者に変えています。

山口県の人たちが好きなもうひとつの名前は「奇兵隊」です。時代劇などでイメージだけが一人歩きしているきらいもありますが、高杉晋作（一八三九～一八六七）が、武士だけでなくあらゆる階層の人たちを迎え入れ、幕府の軍勢を打ち破ったパワーにこと寄せた「～奇兵隊」という団体が、山口ではいくつも活動しています。

私たちはまず、激動の幕末長州で僧侶の活躍がどの程度あったかを検討するために、現在残されている『奇兵隊日記』を読み直すことから始めました。幕末から明治にかけての政治情勢はめまぐるしく変わりますが、元治元（一八六四）年から慶応二（一八六六）年の二次にわたる長州との戦争に幕府側が敗れたことで幕府の凋落は決定的になりました（野口、二〇〇六）。そして、この長州戦争の中で相互にスパイを送り込む命をかけた情報戦を生き抜いたひとりの真宗僧・香川葆晃（一八三五～一八九七）に注目しました。

香川葆晃は、月性の遺志をついだ三人の長州真宗僧と出会い、その盟友関係は生涯続きます。その三人とは、島地黙雷（一八三八～一九一一）、大洲鉄然（一八三四～一九〇二）、赤松連城（一八四一～一九一九）です。時代が明治に入ると「長州四傑僧」とも言われた彼らは、当時日本最大の宗教勢力であった西本願寺本山で、四百人もの家臣団を解体し、すべての寺を本山直属として末寺にも平等に権利を与える大変革を成功させます。彼らは、全国を吹き荒れた嵐のような廃仏毀釈を明治政府に働きかけて止めました。ヨーロッパでの見聞に基づいて政教分離と信教の自由を国家の建前とさせて日本の仏教界全体を救ったことから、彼らは「仏教界を守った維新四僧」とも呼ばれました。これは、幕府と長州の二次にわたる戦争の中で彼らがともに武器をとって戦った仲間たち（木戸孝允・伊藤博文・山県有朋など）が明治政府の要人となっていく過程とも重なっています。彼らは新たに生じた宗主対末寺という関係を、宗会と寺法・宗制・宗法という形で整合させますが、この先駆的実験は、天皇と民権という問題を帝国議会と帝国憲法という形で整理した近代日本のグランドデザインに生かされているとも言えます（平野・本多、二〇

一一)。政教分離の建前をつくった人たちの密接な「政教協力」の歴史に光をあてる必要があるでしょう(児玉、一九七六および二〇〇五)。

文化人類学をはじめとするフィールドワークでは、以前は調査者が透明人間のように、観察したことを客観的な記録に残すというタイプの研究が標準とされましたが、最近では、地域研究のあらゆる記録は、調査する人とされる地域の相互作用の結果だと理解されるようになりました。地域研究は、それが「他人事」である段階から「自分事」となったとき、本当の輝きを発揮するとも言えるでしょう(本誌二十四号「父たちの待つ村への旅—私のアフリカ経験」参照)。実は、私たちがまず香川葆晃に注目したのは、彼が安渓遊地の曾祖父(母の母の父)であるという理由もありました。子孫として入手した戸籍等の情報も集めて、本山で活躍する香川葆晃を支えた側室ヨネ(母の母の母)の存在を突き止めました。ヨネは、長州藩家老職の宍戸家に育ち毛利家の武道を身につけました。兄弟には日露戦争時の大蔵大臣で、伊藤博文につぐ第二代の韓国総監になった曾禰荒助がいました。

失われた記憶をたどる山口県でのフィールドワークのあと、私たちは、済州島から与那国島への旅(本誌二十五号)で、兄弟のちぎりを結んだ、ソウル大学校人類学科の全京秀(チョン・ギョンス)教授とともに、二〇一一年夏、石川から新潟にかけての越の国への旅に出ました。それは、幕末から明治にかけて、あれだけ大きな変動を乗り越えた日本仏教の今の姿を確認する巡礼の旅となりました。

一向一揆で織田信長をも恐れさせた「真宗王国」には、いまも長州四傑僧の足跡があちこちに記されていました。そして、現在の寺と檀信徒が実にさまざまな取り組みをしているということが強く印象に残りました。仏教のプロテスタントとよばれた真宗の教えを、富山県の寺でラディカルなまでにわかりやすく説いた、真宗僧・安渓雅亮(遊地の父の父)の教えに触れつつ、未来をひらく自分学の第一章としたいと思います。

『奇兵隊日記』を読む

幕末から戊辰戦争にいたるまでの奇兵隊をはじめとする長州藩の諸隊の記録を集成した『奇兵隊日記』に目を通してみた。刊本で本文二千頁近くあるのだが、下巻の「叢書第二」の慶応元年九月の記録に、「宗淵　葆光　謹白」という文字がある。その直前の段落は、以下のように書かれている。

然ル処又々新選組浪士より本願寺へ何哉嫌疑之筋申立、即日去八月十九日本山家来平井嘉平治と申者逮捕致候、旁

内裏甚混雑致吾等事も自然発覚之場ニも可立至哉之様子ニて不得止事八月廿六日発京、同廿八日浪華解纜仕候、已上
尚当春来より之事追々聞及候分下ニ記シ申上候　丑ノ九月

訳せば、以下のようになろう。「ところがまたまた新選組浪士が西本願寺にやってきて、何かの嫌疑があると称して八月一九日に本山の家来である平井嘉平治という者を逮捕してしまいました。かたわら境内も非常に混みあってきて我々のことも自然に発覚するかもしれない情勢となりましたので、やむを得ず八月二十六日に京都を出て二十八日に大坂を船出しました。以上。なお、この春からの事をあとから聞き及びました分については、以下に書いてご報告します。丑年の九月」

この年三月、新選組は前年七月八日の池田屋事件以来ふくれあがった隊士を収容し、かつ七月十九日の禁門の変で朝敵となった長州藩とつながりの深い西本願寺を監視するために屯所を壬生から西本願寺に移動していたのである。

刊本では、記事の切れ目がわかりにくいが、京都大学附属図書館の維新資料データベースを参照すると、下巻の三〇〇ページ中ほどの「覚書」からがひとつの文書で、三一〇ページまでが、滞在中の見聞報告である。はじめの部分は、以下のようである。

「去る七月廿五日再度上京の儀蒙命即日発途、八月八日着坂、夫已来京坂処在奔走時状相窺ひ候分左ニ奏上候」（去る七月二十五日に再度上京するよう命ぜられましたので、すぐに出発し、八月八日に大坂に着きました。それ以来京坂で奔走してこっそり調べてきた分を左に奏上いたします。）

これは、長州藩が京都大坂に差し向けた密偵としての二人の僧侶から藩への帰還報告である。西本願寺に潜んでいたことから、西本願寺に属する真宗僧であると考えられる。約一月あまりのミッションだったが、これが初めての派遣ではなく、新選組に見つかりそうにならなければ、もう少し長く滞在を予定していた書きぶりである。内容の詳しい分析は、これから取り組むことにして、ざっとそのあらましをみておくと、見聞きしたことの報告と、署名以降のやや信頼度の落ちる伝聞資料に分かれているが、前年十月からの情報である。

もっとも重要な情報のひとつは、長州に送り込まれるスパイについてのものである。

「一　幕府を始メ諸藩より間偵之者二州へ続々相遣ハシ候由」と防長二州に送り込まれた密偵の情報である。具体的には、土佐藩士渡辺松之丞（まつのじょう）なる者が京都山崎で拘束された件があり、その供述は以下のようである。

五月六日発京同一四日馬関（下関）着港、奇兵隊又は遊撃軍中に罷在候元土藩人土方楠左衛門変名瀬川定彦、上田宗児変名後藤原蔵、細木元太郎、池内蔵太変名細川佐馬之介数人元来知己之もの右等を欺き、隊長和泉十郎ニ面会致し候由、右隊中より鳥屋弥介方に預ケ置種々供応等有之、数日滞在中二州之形勢探索致し候よし、然ル処廿六日相成粗事実発覚之様子ニて嫌疑相かゝり候由洩聞候ニ付、其の夜脱走致し直様帰郷致し候処……。（下巻　三〇四頁）

土佐藩の（手裏剣の名手として知られた）渡辺松之丞が奇兵隊からの情報収集をしていたが、ばれたため逃げたというのである。

これに引き続いて、（家康に土地を寄進されてできた）東本願寺が、徳川の恩義に報いるために長州を攻めるための兵を出して協力しようと申し出たが遠回しに断られたことについて、長州との間を疑われたのではないか等と門主以下頭を悩ませているという報告がある。続いては、各藩の軍備の整えぶりの報告である。奇兵隊第三代総管で、月性にも師事した悲運のリーダー赤禰武人（一八三八～一八六六）が久留米藩士・淵上郁太郎（一八三七～一八六七）とともに、四月に浪華で捕まったこと、前年十月に刑場でさらし首にされた者たち七名の氏名と年齢、前年（禁門の変のさなかに）興正寺で捕らえられた諸隊の一つ、僧侶からなる金剛隊の僧五人とその従者一人は、興正寺からいろいろお願いしても釈放されず、一人は獄死したこと、などなど、「京坂潜伏中見聞之分奉申上候」というのである。

このように、前年の禁門の変によって「朝敵」とされた長州藩にとっての軍事上重要な情報を中心に、東本願寺の情勢や、金剛隊のことなど、僧ならではの情報も収集している。宗淵なる人物については不勉強でいまだわからないが、二人目の「葆光」は、後に西本願寺本山で活躍する学僧の香川葆晃を指すと考えられる。龍谷大学が大正十一年に発行した『真宗大辞彙』を、新漢字・新かな遣いに変え、わかりにくい言葉は適宜かっこで補って、以下に引用する。

ホウコウ　葆晃

真宗。本願寺派の勧学。初の名は大証、緇渓と号し、香川を姓とす。越後中頸城郡竹直真照寺に生る。十一歳富永某に就て漢籍を学び、十四歳笈を会津に負う。十九歳上京して本山の学林に懸籍し、苦学励精業大に進む。安政四（一八五七）年制度し、文久三（一八六三）年七月得業を授けらる。当時国内内憂外患交々起り、幕府策の施す所を知らず。晃、資質剛毅、黙視するに忍びず。乃ち天下の志士と

交り陰に陽に王事に尽す。為めに幕府の忌諱に触れ、捕吏の追跡する所となる。晃、吏前に刀を抜きて盤上の鉢を裁割して曰く、余を捕えんとする者亦斯の如けんのみと。吏、恐れて逡巡す。是に於て悠然として去る。然に其後、吏の為めに欺かれ、縛せられて六角の獄に投ぜらる。仍て一夕水門を潜りて脱獄し、長門の萩に走る。会々同地に僧風改正の挙ありしを以て之を扶く。明治元（一八六八）年二月藩士の勧めにより周防富田の善宗寺に入山す。茲歳鉄然・黙雷・連城等京に上りて本山改革を企つるや、晃、亦其議に与り、尋で上洛して尽瘁する所あり。已して業、漸次其緒に就き、翌年七月本山より白銀五枚、輪袈裟一領の賞を受く。此冬東京に赴き、官の当路者（＝重要人物）を訪うて宗政上の私見を陳ぶ。尋で一宗の行政に参与し真摯事に従う。十年五月二等執事となり、翌年三月議案局制規部委員長を拝命す。尋で特選会衆に補せられ、又執行兼教務局長に任ぜらる。十七年本山の職制更改の事あるや、二等執行兼興学局長となる。二十三年二月執行に任ぜられ、八月大学林副綜理本務取扱となり、翌年八月更に同綜理を拝命す。爾来専心育英に従事し、恩威（＝優しさと厳しさ）並び垂れて学徒を悉く悦服せしむ。二十八年其功に依りて香色衣体著用の恩典を蒙る。茲歳安居（＝合宿修行）に選択集を副講す。翌年顧問上首に補せられ、三十年大学林綜理を辞して再び執行となる。翌年又之を辞して鹿児島別院輪番に赴任す。同年秋病を得て帰京するや、宗主、憂慮して措かず、直に侍僧を病牀に派して慰問せしめ、又特に某医に命じて診療を加えしむ。是より先、同十五年学階輔教を受け、二十三年司教に進みしが、是に至りて更に勧学を授けらる。十月十三日終に寂す。寿八十四。円珠院と諡す。後、同四十二年一月特に生前の偉功を追賞して特別賞与甲種を贈らる。

幕末には、刀を振り回したり脱獄したりしていた僧・葆晃が晩年は本山の教育担当者として宗主からも大切にされたことがわかる。特業とは、五段階ある学僧の段階の一番はじめのものである。掲載されている挿絵は、への字型の口をした頑固そうな老人である。

一般にも注目されている幕末の志士や、著作や研究が刊行されて、真宗内あるいは山口県内ではそれなりに知られている月性あるいは鉄然・黙雷・連城に比べて、今日葆晃について書いたものは極端に少ない。最近刊行された村上護氏による力作『島地黙雷伝』（村上、二〇一一）は、その貴重な例外であり、葆晃のことが数ヵ所出てくる。いかにもきかん坊といった風貌の若き日の葆晃の写真も掲載されている。

その村上氏の香川葆晃の記述の中に、上記の『真宗大辞彙』

若き日の香川葆晃（村上、2011より）

とはくいちがう点がいくつかある。まず第一は、亡くなった時の年齢が八十四歳ではなかったこと。鉄然・黙雷・連城とほぼ同じ年格好であった葆晃は、一八三五年に生まれ一八九八年に六十四歳で没したのである。もうひとつは得業を与えられた年を一年早い文久二年としていること。そして、京都の六角獄舎を脱獄して萩に助けを求めた葆晃は、長州藩士によって幕府の密偵の疑いをかけられ、吉田松陰も入っていた野山獄に入れられてしまったと書いている（村上、二〇一一）。

葆晃が萩で収監されたことについては、『真宗大辞彙』には載っていない。たまたま同地に僧風改正の挙があったので、それを助けた、とのみ記されている。そして、慶応四（一八六八、改元後さかのぼって明治元）年二月、藩士の勧めにより周防富田（とんだ）、現在の周南（しゅうなん）市にある浄土真宗本願寺派の善宗寺住職となり、香川姓を名乗るのである。

晩年の香川葆晃（真宗大辞彙より）

幕末に萩に到着してから、明治までの激動の時代に葆晃は何をしていたのか。その疑問を解くには、足で歩いて関係者のお話を聞きながら史料を探すにしくはない。幕末維新の真宗僧の研究をしておられる児玉識先生とその俊秀で月性の専門家である岩田真美（現在龍谷大学講師）さんとともに、初めて周南市に善宗寺を訪ねる機会を得た。二〇〇九年二月のことであった。広壮な境内には「円珠院釈葆晃和尚」と彫られた大きな石碑があり、裏には「明治三四年立之」と刻んであ

る。

「葆晃さんのひ孫にあたります」と遊地が名乗って前住職・香川知行師に教示をお願いしたところ、秘蔵の「周防国富田政所山善宗寺系図」その他の史料の閲覧を特別に許された。明治十九（一八八六）年生まれで、昭和十八（一九四三）年に山口県立大学の前身の山口県女子専門学校の校長に就任した香川静爾師が作成した系図には、葆晃は野山獄に両三年にわたり入獄と書かれていた。しかし、そのもとの資料と思われる草稿には、入獄は一両年とあり、疑いが晴れるまでの間に獄中で写経・写本をし、司馬遷の『史記』を三度読んだとある。さらに、『真宗大辞彙』を踏襲しつつも、そこにないエピソードも書き加えられていた。逮捕にいたる前のこと、宿屋の二階で幕吏と議論になり、雨の降る中を庭に突き落とされた葆晃は、「腕力には屈するも議論には屈せず」と雨中に立ち尽くしていたという。また、葆晃は宗主の詩作の添削役をつとめていた。病いを得て特に診察を命じられた「某医」とは京都滞在中の明治天皇の橋本侍医、すなわち安政の大獄で斬首された橋本左内の弟で日赤創立者の橋本綱常（一八四五～一九〇九）であった。

それにしても、葆晃が野山獄に入っていた期間が二、三年と一、二年ではずいぶん違う。なぜこんなに食い違いがあるのだろうか。村上（二〇一一、一二〇頁）は、「葆晃の以後の行動は詳らかでない。やがて黙雷とは盟友になるわけだが、どんな事情で出獄したか分からない」と書いている。

その事情を示すのが、冒頭に示した『奇兵隊日記』の記録であると考えられる。彼は長州藩の命を受けて長州と京坂をひんぱんに行き来しながら諜報活動していたのだ。そうであれば、「以後の行動は詳らかでない」のはむしろ当然のことだし、葆晃は後年にいたってもそのことをあえて語ろうとはしなかったのであろう。

京都には、薩摩・長州・土佐をはじめ、福岡・広島・津・佐賀・徳島・宇和島など有力大名が次々に上京し、それに乗じて諸国から尊攘派浪士が流れ込んできた（野口、二〇〇六、二二頁）。そんな中に、西本願寺に属する若き学僧の葆晃もいた。そんな尊皇攘夷派がのし歩いていた京都の雰囲気ががらりと変わるのが、公武合体派の会津藩と薩摩藩が手を結んで、朝廷内の尊王攘夷派の長州藩勢力の追い落としに成功する文久三（一八六三）年八月十八日である。尊皇攘夷派の七公卿はこのクーデターで失脚して長州に落ち延びる。それ以後、京都における尊王攘夷派の取り締まりが強化され、葆晃も六角獄舎につながれたのであろう。

では、そこから脱獄したのはいつか。葆晃は「一夜水門を潜りて脱獄し、長門の萩に走る」のである。「水門」とはなにか。吉田松陰は伝馬町牢屋敷の見取り図を父に書き送って

周南市善宗寺境内

いるが、六角獄舎の構造を知りたいと思う。脱獄は容易なはずがない。それが可能になったのは特別の事情があるのではないか。

七卿が長州に落ちのびた翌年、元治元（一八六四）年七月十九日、長州藩の急進派の久坂玄瑞（一八四〇～一八六四）らに率いられた緒隊が京都で挙兵して破れ、吉田松陰の一の弟子であった久坂も自害する。御所にむけて発砲したことから長州藩が「朝敵」とみなされるきっかけとなる禁門の変（蛤御門の変）である。みずから藩邸に火を放った長州藩邸の侍たちは、西本願寺に逃げ込んだ。京都の二万七五〇〇戸が焼失する大火の迫る中で、前年十月の生野事件で六角獄舎に入牢していた平野国臣（一八二八～一八六四）ら三十三名が惨殺される。葆晃はそのどさくさに脱獄したのではないかと、先の著書で村上護氏は想像しているが、特段の根拠は示していない（村上、二〇一一、一二〇頁）。この推定の通りであれば、吉田松陰がその死の前年に再度野山獄に収監された安政五年の六年後に葆晃は萩で野山獄につながれたことになる。

『奇兵隊日記』によれば、宗淵および「葆光」は、慶応翌年七月には（両人あるいは一方にとっての）二度目以上の京坂行きを果たしている。葆晃が得業を授けられた文久三年七月から数えても、慶応元年七月までは、二年しかない（村上護氏は、葆晃が得号を授けられたのを文久二年としているが、ここは『真宗大辞彙』に従う）。そうであれば、「政所山善宗寺系図」に書かれている、入牢が二、三年にも及ぶということはありそうもない。想像をたくましくすれば、この動乱の時期に長州藩の密偵として命がけの情報戦の最前線で働いた事実は隠され、表むきは野山獄に入牢中となっていたのではあるまいか。あるいは、野山獄からの釈放の条件が、長州藩の密偵として京都大坂の情勢を探ることだったのかもしれな

いと考えられる。

葆晃は、鉄然・黙雷・連城らの宗門改正運動を積極的に支援したと『真宗大辞彙』は述べているが、それを始めた時期は、京坂から戻って、この『奇兵隊日記』に収録された報告を提出した慶応元年九月以降ということになろう。

明治になって葆晃は、黙雷らと協働して、廃仏毀釈の嵐を止めるために奔走した。徳山藩内のすべての寺院を一ヵ所に集めるという方針にもとづき、藩内最大の伽藍である善宗寺がまず解体された。ついに明治八年にすべてを神道式に指導するという大教院が廃止され、信教の自由が認められた時には、風雨にさらされた部材が腐っていて、明治十一年に再建された善宗寺の本堂はかなり小さくなったという（善宗寺資料）。

香川葆晃と長州藩士の娘

いずれにせよ、藩士の勧めにより、藩差し向けの養子として葆晃は、江戸時代があと半年あまりで終わりとなる一八六八年二月に、百三十もの末寺をもつ大寺であった善宗寺の第十六世住職となる。時に葆晃は数えで三十四歳。前住職円順（生没年不詳、体が弱く四十歳ほどで死去）の妻で、天保九（一八三七）年生まれだから葆晃よりも二歳年下のアヤと結婚。このときアヤには円順との子で、のちに善宗寺第十七世となる則麿がいた。則麿は万延元（一八六〇）年十二月生まれであるから、この時数えで九歳である。則麿の子の静爾が作成した「政所山善宗寺系図」では、アヤを綾と表記しており、明治五年に葆晃と綾との間に一粒種の卓爾が生まれたが、不幸二十四歳で夭折したとしるしている。

その後の葆晃は、本山で活躍し、大学林の綜理（学長職）として育英に従事し、当時「東に慶應義塾・西に大学林」と言われ、日本初の白壁の学舎を建築した。そして、善宗寺には葆晃が野山獄で書いたという安居講義録の一部が今も大切に保存されている（本願寺山口別院ホームページ）。

そして、これまでには報告されていないが、もうひとつのできごとが起こっている。それがないと、この文章の執筆者の片割れも生まれていないので書いておく。それは、葆晃と長州藩の侍の娘との出会いである。安渓遊地の母の母の母にあたるその人の名前はヨネ（ヨ子）。安政三年生まれだから、葆晃が野山獄から出た慶応元年には、まだ数えの十歳である。遊地の母の大正十三（一九二四）年頃の記憶によれば、毛利家の武道にたけ、強盗を一撃で倒すような恐ろしく強いおばあちゃんであったという。

ほとんど山口の寺にはもどらず、廃仏毀釈との戦いをはじめとして本山での仕事に多忙をきわめた葆晃の京都での生活

大講義香川葆晃
新潟縣　長野縣
右管下巡廻差免
候事
明治八年十月七日
四派管長
大教正大谷光尊

葆晃の明治８年の辞令。この年５月、尊皇愛国思想を広めるための大教院は廃止されたが、宗主明如の肩書きは大教正のままである。

を支えた女性がヨネであった。「政所山善宗寺系図」の葆晃の記事の末尾にも「側室ヨネ」として登場している。一男三女が生まれ、上から順に、テイ、ヒデコ、宗一、ヒサと書かれている。戸籍によれば、ヨネは安政三年八月晦日生まれ。葆晃の「妾」として入籍したのは明治十一年一月十二日、ヨネは二十三歳、葆晃はこのとき四十四歳であった。おそらくこのころ長女テイが生まれたものであろう。しかし、葆晃の死亡後につくられた戸籍には、すでにテイの名はない。その次の、遊地の祖母であるヒデコはおそらく十年以上の時をおいて明治二十三年三月に、宗一は明治二十四年八月、そしてヒサは明治二十六年十一月に誕生している。葆晃が亡くなった明治三十一年十月には、三人ともまだ幼かったのである。

ヨネは葆晃の遺児を育てるとともに、葆晃のもらった辞令や免状を大切に保管し、それらはヒデコ、その次女芙美子を経て、いまは遊地が四十二通をあずかっている。その分析と、ヨネの為人（ひとなり）や、葆晃との生活についてのより詳しい記憶の発掘を宿題として次に進みたい。

月性と『仏法護国論』

月性は、周防国遠崎（たちざき）（現在の柳井市大畠）の浄土真宗・妙円寺の僧で、境内には、一九七〇年に月性展示館が設置され、常時六百点の資料を展示している。私たちと全京秀先生は、案内ボランティアの女性Kさんの名講義ぶりに舌をまきながら拝観した。館内では南の島にキリスト教の宣教師が来て、そのあと軍艦がやってきて植民地となるようすなどをドラマ化して大正十二年頃に公開された映画「史劇海防僧妙円寺月性上人」の四十五分におよぶ抜粋をDVDで見ることができる。月性は詩作に秀で、その説得力ある説教を聞かせるために、吉田松陰も門弟を派遣している。長崎で巨大なオランダ

船を見たことから、常に攘夷の必要性を説いて海防僧と言われた。彼の著作「護法意見封事」は、当時の仏教界最大の宗派で、防長二州の全真宗寺院が属していた本山・西本願寺の公式見解となり、西本願寺発行の『仏法護国論』として、全国の末寺に広められた（岩田、二〇一一）。妙円寺境内に保存された月性の私塾「清狂草堂」は、吉田松陰が松下村塾を引き継ぐ安政四（一八五七）年よりも九年早い嘉永元（一八四八）年に開塾して多くの門弟を集めた。その中に香川葆晃もいたが、開塾当初からの門弟で、月性の気風をもっともよく受け継いだと言われるのが、遠崎の対岸、瀬戸内海に浮かぶ周防大島の大洲鉄然であった。

月性（清狂草堂にて）

大洲鉄然と四境戦争

大洲鉄然は、現在の周防大島町久賀にある浄土真宗本願寺派の覚法寺に生まれた。二〇一一年七月、私たちは山口県立大学国際文化学部の英語による授業「国際理解」の合宿フィールドワークを周防大島でおこなった際に、学生や留学生たちとともに覚法寺におじゃました。鉄然のひ孫にあたられる、大洲彰然師は、短時間ではあったが名調子で実感のこもるお話をしてくださったうえ、鉄然の評伝と写真を恵与された。

そのお話と評伝によれば、鉄然は、十二歳で得度し、十五歳で月性に入門。のち安芸・豊前に遊学し、各地の志士と交友。剣客の桂小五郎（のちの木戸孝允、一八三三～一八七七）らと親交のある鉄然は、文久三年に泉州堺で道場を開き武術を教えた。鉄然は、同年春に得業の資格を求めて学僧の道を歩もうとしたが、資格試験に十両ものお金がいることに怒って窓口で試験をボイコットし、武道の道へ進もうとしたのであった。しかし、同年五月の下関での外国船砲撃や、八月に尊皇攘夷派の七公卿がクーデターで失脚して長州に落ち延びるといった政局の激変にともなって同年帰郷した。高杉晋作（一八三九～一八六七）が奇兵隊を組織した年である。鉄然は上関義勇隊に入隊したもののこれにあきたらず、翌元治元年、諸

柳井市妙円寺境内の清狂草堂

隊のひとつとして真武隊を結成。これには、真宗僧らも多数加わった。翌慶応元年には、真武隊を再編して南奇兵隊と名付け、さらに第二奇兵隊と改名して鉄然はその参謀となる。慶応二年、朝敵となった長州を征伐するとして、六月には幕府側十五万の兵が防長二州を包囲する。対する長州勢はわずか四千程度。戦端は、六月八日、大島口から開かれた。大洲鉄然は、早駕籠で総大将の大村益次郎（一八二四～一八六九）に救援を求めるが、大島はたちまち幕府軍・松山兵によって占拠・略奪・焼き討ちされる。しかし、高杉晋作の汽船による夜襲、長州兵による山からの反撃、女たちを含む農民の果敢な抵抗によって、大島は奪還されたのであった（森川、一九七〇、野口、二〇〇六）。

覚法寺では、司馬遼太郎が朝日新聞に連載した歴史小説『花神』で鉄然が大村益次郎に面会を求める場面の挿絵の風間完による原画や、その後本山で要職を務めた鉄然の死去に際する宗主はじめ各界の名士の弔辞などを興味深く拝見した。覚法寺の近くには、四境戦争の記念碑の並ぶ公園や、幕末維新の戦いに倒れた人たちの墓所なども訪問した。

真宗僧と『長防臣民合議書』

藩内が正義派（討幕派）と俗論派（恭順派）に二分して、はげしく対立しているとき、月性の遺志をついだ真宗僧たちが護法、護国のために正義派を支持すべきことを民衆に説いて廻ったことの意義は大きい、と元龍谷大学教授で防府市富海円通寺の住職でもある児玉識師は指摘している（児玉、一九七六など）。大洲鉄然は、文久三（一八六三）年、堺からもどるとまもなく、藩主の命令で防長二州をめぐって、民衆に尊皇攘夷・幕府の失政・防長の危急を説いてまわった。その

熱弁は大衆を叱りつけるような激しいものだったが、各地の講演には遠近の武士、老若男女が押し寄せて、門が倒れるほどであったため、「鉄然上人の門こかし」と噂された（森川、一九七〇、九頁）。

四境戦争直前の慶応元年、長州藩は当時の全戸数をはるかに上回る三十六万部ともいう『長防臣民合議書』を印刷して、幕府と戦う長州藩の大義について藩の内外に配布し、庶民にもわかりやすく伝えた。幕末の長州藩の寺子屋の数は一三〇七校で、その数は全国で二位であった（一坂、一九九六、八五頁）。四境戦争を長州側の勝利に導いた、全住民を巻き込んだ戦いにおいて、寺子屋の普及率の高さと識字・啓蒙のために教師としての僧侶が果たした役割は大きなものがあったと考えられる。

島地黙雷と西本願寺の改革

島地黙雷については、自伝を含む著作も多く、最近、村上護氏による力作『島地黙雷伝』（村上、二〇一一）が上梓されたので、ここでは、主にそれによりながら黙雷の事績をごく簡単にまとめておく。

黙雷は、新南陽市の和田舛谷（まだに）の専照寺に四男として生まれた。山口市徳地堀（とくちほり）の妙蓮寺に養子に行き、肥後で苦学。のちに徳地島地（しまじ）の妙誓寺住職となり、姓を島地とする。慶応二年、萩で大洲鉄然とともに改正局を開き、真宗の宗徒を教育した。明治元年、京都で赤松連城とともに、坊官制の廃止・門末からの人材登用などの、西本願寺の改革を建白。明治五年、西本願寺からの依頼によって岩倉使節団の一員となり、ヨーロッパ方面への視察旅行を行ない、帰途エルサレム、ムンバイを歴訪。インドの仏跡を訪ねた最初の日本人となった。帰国後、政教分離、信教の自由を主張、廃仏毀釈の嵐を止めるために奔走した。明治二十五年、盛岡市の北山願教寺第二十五世住職となる。また、日本赤十字社や早稲田大学仏教青年会の設立に寄与した。

黙雷の誕生した舛谷の専照寺は、急峻な山間の寺であり、訪れた時はまことに美しい里山の光景の中にあった。二〇〇九年四月五日、島地の妙誓寺では、黙雷上人百回忌法要が執り行なわれ、黙雷の偉功を称えて新たな石碑が建立され、稚児行列も繰り出すなどの地区をあげての行事が挙行された。島地には、妙誓寺の住職を辞した後も、黙雷がしばしば逗留した雨田草堂が現在も保存され、その庭には、「慈父黙雷閑居逍遙之処」という巨大な石碑が立っている。

私どもも、二〇〇四年から地域活性化のための「徳地づくり達人塾」の立ち上げにかかわる中で、島地にはたびたびおじゃまして、親しい場所となりつつある（安渓・安渓、二〇〇

左から鉄然・黙雷・連城（覚法寺提供）

九など）。徳地の郷土史家であった赤木森（はやし）さんは、徳地のテーマパーク『重源の郷』の文化伝承館館長であったころ、そこに展示してある黙雷上人の伝承を紹介してくださりながら、香川葆晃のことを「ここらでは、ほこうさんとお呼びしています」と語っておられた（安渓、二〇〇六）。黙雷の誕生寺の専照寺も、住職だった妙誓寺も、善宗寺の末寺で明治元年にそこの住職となった葆晃とのつながりは当然深いわけだが、上にあげたいきさつから、出会いはむしろその前の慶応二年、黙雷と鉄然の萩の改正局の取り組みの一環として、清光寺学校でフランス式の軍事教練を含む文武の教育をしたころからだっただろうと考えられる。

四傑僧の初期の功績として「僧風改正の挙」「本山改革」と言われるのだが、それが具体的に何を意味しているかを知ったのは、黙雷終焉の地、盛岡市に願教寺を訪ねた時だった。

二〇〇九年三月、檀家が千軒を超える堂々たる大寺である願教寺の住職・島地興霖師にお会いして、黙雷上人のことなどをうかがいつつ、持参した香川葆晃の辞令のいくつかをお見せした。明治八年から葆晃が病を得て亡くなる旅となる鹿児島出張を命じる明治三十一年五月二十日付けのものまでの洋紙に楷書で書いて角印を押した形式のものとは違って、一通だけ、和紙に草書で書いた、明らかに雰囲気が異なるものが入っていた。「明治二一己巳（つちのとみ）年二月四日」とあるから、葆晃が善宗寺に入ってちょうど一年目の、もっとも古いものである。着用できる袈裟の色などの格式を定める内容である。その署名をみて、興霖師は、「おお、下間（しもつま）家の発行した文書じゃないですか！」とおっしゃったのだった。

下間氏は、本願寺の家臣の武家のひとつで、浄土真宗の中興の祖である蓮如のころには、一向一揆の武闘部門を率いた。信長と戦った顕如が門跡となったことから、門跡に付随する

坊官という位を与えられ、それ以後、次第に本願寺の中での権勢を強めていった。

島地黙雷らの取り組んだ本山の改革とは、具体的には下間氏に牛耳られていた本願寺の運営を僧と門徒の手に取り戻そうという、権力奪還の取り組みだったのである。

「あちらは、宗主に改革を訴える黙雷らを亡き者にしようと刺客を送り込んできますから、こちらでも用心棒をたてて防戦するというようだったんです。」

このように興隆師は説明された。命がけの戦いは明治に入っても京都で続いていたのである。そして、本山に四百人もいた家臣団は明治四年に解体され、明治九年までに複雑な末寺制度は、寺は本山にだけ直属するというすべての寺が平等な新組織に改められたのである（村上、二〇一一を参照）。

本堂に案内されて、黙雷の後を継いだ島地大等（一八七五～一九二七）の額などを見ながら、黙雷らがこの戦いに勝利して、代表を選び議会をつくったことや、その規則を定める方法を採用したことが、木戸孝允、山県有朋、伊藤博文らとの親交を通して、のちに帝国議会や大日本帝国憲法制定のモデルともなったのだ、という興味深い見解をうかがったのだった。

島地大等は新潟県出身で、願教寺に入ってからは宮沢賢治（一八九六～一九三三）にも大きな影響を与えた学僧で、墓は大谷本廟の新勧学谷にある。遊地の母が一九五六年から翌年にかけて書いた日記には、彼女が五歳の時（一九二四年）に島地大等が彼女の頭をなでて「お嬢ちゃんはマレー人のようだね」と言ったという記憶がメコン川に生きる人々の記録映画を見て、忽然とよみがえったと書き付けられている。

赤松連城とイギリス留学

島地黙雷とともに、本山改革に力をつくした赤松連城は、四人の中ではもっとも若い。金沢の寺で修行し、富山で得度し、黙雷の勧めで二十三歳の時に周南市の徳応寺の住職となる。明治五年、仏教者として初めてイギリス留学。仏教大（現龍谷大）綜理をつとめた。与謝野鉄幹は義父連城の助けを受けながら「私立白蓮女学校」（後の徳山女学校）を創設し女子教育を始めた（徳応寺、一九九二）。また連城の孫の赤松智城は、京城帝国大学の宗教人類学の教授を昭和二（一九二七）年から昭和十六年まで勤めたフィールドワーカーであったので、その忘れられた業績を発掘するという先駆的研究（全、二〇〇六など）のためにソウル大学校人類学科の全京秀教授は、山口を何度も訪れておられたのだった。

連城と盟友であった香川葆晃は、一等巡検使として明治三十一年五月二十日付けで鹿児島別院の輪番として出張を命ぜ

られたが、鹿児島で病をえて十月十三日に京都で亡くなる。六十四歳であった。その四十九日法要にあわせて満中陰志として作成されたのが、葆晃最後の著作『本願成就文講義』であった。四十年におよぶ長年の友を失った悲しみをこめた追悼の序文を書いたのが赤松連城であった。購入した古書に貼られた紙を見ると喪主はまだ幼い香川宗一となっている。おそらく連城は、残された京都の家族の面倒をも見てくれたのではなかったか。

イギリスの大旅行家イザベラ・バードはその日本紀行の中で、明治十一年に本願寺に連城を訪ねた（バード、二〇〇八）。

仏教の数ある宗派や分派のなかで、真宗ほどわたしの関心をそそるものはありません。真宗は門徒と呼ばれることもあり、一二六二年に［没した］親鸞が創始しました。禁欲主義、苦行、断食、巡礼、尼僧院、修道院、社会からの隠遁、魔除け、お守り、知らない言語で書かれた経典を読むことに異議を唱え、思想と行動の自由を謳い、伝統的な神道や国家の影響からの解放を求め、また家庭は清浄の源でありその実例だとして、親鸞は京都のある高貴な家柄の女性をめとり、妻帯した僧の第一号となりました。門徒は最大の宗派ではないとしても、知識層、有力者層、資産家層にまず広がってたいへんな力を発揮し、外国式の神学校を組織しています。そこでは神道とキリスト教ばかりでなく仏教の腐敗を阻止・攻撃することができるよう仏教学と西洋学が教え込まれます。……この動きは仏教を日本の精神的な力として新しく改革すること、再編することを目的としていますが、その先頭にいるのがとびきりすぐれた知性、高い教養、不屈のエネルギー、知名度の高さを兼ね備え、自分の信仰の将来に対して遠大な志を持った僧である赤松氏なのです。……赤松氏はとても紳士的で礼儀正しく、英語を非常にうまく話し、表現力豊かで、わたしには驚くほど率直に話してくれているように思えました。

連城は、バードとの一問一答で日本の宗教について、以下のように答えた。

神道は本当に自然崇拝の最も素朴な形で、儒教や仏教との接触によりやや装飾されています。宗教としては絶えており、政治的道具としては衰えつつあって、活気のあったためしがありません。仏教はかつては強力であったもののいまは弱く、復活するかもしれないし、しないかもしれない。

神道についての意見はともかく「仏教は復活するかもしれ

ないし、しないかもしれない」という明治十一年の連城の言葉を、それから百三十三年後の日本で検証すべく、二〇一一年八月末、全京秀教授とともに私たちの一家は越の国の巡礼に出発した。

赤松連城が学んだ西勝寺と西本願寺金沢別院

八月二十二日、越の国への巡礼の旅は、金沢市から始まった。白山麓に「一向一揆の里」という道の駅があるというが、金沢からは遠いために今回は訪問を断念。金沢駅から歩いて行けるところに七十もの寺院が並び立つ寺町がある。一向一揆の監視のために集められたという。そのせいか東西本願寺の別院も、赤松連城が育ったという西勝寺も、寺町を外れたところに建っている。

まず訪れた西別院の本堂では、拝観者の世話をしておられた女性が話しかけてこられた。九十歳という。

「このあたりに真宗のお寺が五ヵ寺ありますが、わたしは毎朝西別院で掃除や草ひきをさせていただき、お朝事のお話をきいて帰ります。雨の日も雪の日も風の日も三百六十五日歩いて来ていましたが、最近は近所の方がここで働いているので来るときはその車に便乗しています」とにこやかに話しながら、別院内を案内してくださった。このような熱心な門徒が「真宗王国」と呼ばれる北陸の礎であることを実感させる出会いであった。全先生は、韓国仏教との違いが気になるらしく、本堂に掲示された東日本大震災への募金の呼びかけの写真を撮る。

別院を出て西勝寺を探しながら、庭木を切った枝の運び出しを指示している人に道を尋ねた。その方が西勝寺の前住職・西野慶秀師だった。突然の訪問であったが、赤松連城のお話が聞きたいと来意を告げると、庭園に面した部屋に通された。藪内流の茶道に関わりが深い寺で、風雅な茶室も備えている。加賀百万石が育てた文化の厚みと、その歴史を受け継いでいく寺院の役割を感じさせる空間である。以下は、西野師のお話である。

「連城さんはここで育ったので、普通の人として親しまれていました。そんなに偉くなった人だと知っていれば、『連城』と書かれた文机も処分しなかったのですが、そんなそぶりもみせない人でしたから。連城さんが書いた掛け軸や色紙をお見せしましょう。彼の西勝寺への手紙や、学寮の仲間からの手紙も残っています」。

連城は天保十二（一八四一）年、金沢の大工町に佐助・梅の三男として生まれた。父は越中城端の出身で、農業をしていたが後に金沢に出て、扇箱製造を業とした。連城は六歳であった一八四六年から、この西勝寺に養われ、ここに住んで

藩校明倫堂で学んだという。本堂の奥に、中二階のようになった連城が暮らした学寮のあとがある。

連城が一八六三年、二十三歳で徳応寺に入り、赤松真成の養子になってからの活躍ぶりを、徳応寺を私どもが訪ねた時の様子をまじえてお話し、全先生は赤松智城の京城帝国大学時代のお話などをして、話がはずんだ。

昨年病気のために息子さんに住職を譲ったという西野師は、住職になる前は、二十年間石川県知事の選挙参謀を務めたというエネルギッシュな方である。お話を聞いていて、ふと、島地黙雷がヨーロッパでの見聞を踏まえた政教分離と信教の自由を主張していくときに、宗教者としての建白書を提出することでどこまでも政治にコミットしなければならなかった歴史（村上、二〇一一）を思い浮かべた。思いがけず、加賀料理の風格ある料亭「つる幸」にご招待いただいた。恐縮しながらも、とてもご病気とは思えない健啖ぶりに圧倒されていると、夫君とともに西野師の古い友人であるという「つる幸」の女将が「以前はこの三倍ぐらいお元気でした」とささやいた。

翌々日、連城が得度（とくど）した富山県小矢部（おやべ）市西中（にしなか）の願称寺をたずねたが、あいにく住職は九州出張中とのことで、お話はうかがえなかった。境内には、連城が書いた地域の老人の功績をたたえる石碑が立っていた。

バイオリン教室と図書館のある寺

子どものころ富山県高岡市で育った遊地は、十年間バイオリンを習った図書館のある寺を探してみた。訪ねあてた寺は専福寺という浄土真宗本願寺派の寺院であった。おりよく住職の土岐慶正師が庭に出ておられ、地域の集会所としても使えるように保存・改修された図書館に案内してくださった。昭和七年に設置された図書館は、当初は図書館協会にも加入し、本に親しむ習慣を地域にひろげる役割を担うものとして高く評価されたという。高岡バイオリン教室を主催していた屋敷文夫先生に図書館をお貸ししたいきさつは住職も子どもの頃のことでご存じなかったが、今も図書館にはグランドピアノがあり、多彩な文化活動の拠点施設としての役割を寺が果たそうとしておられることがわかる。そういえば、連城の徳応寺住職の赤松泰城師も、夫人と大学の音楽サークルで出会ったことから、音楽ホールとしても使えるモダンな設計の本堂を建て、法座ごとに坊守様のエレクトーンが響く。当時は畳のない本堂が珍しく、全国の寺院からたくさんの視察があったという。そして、山口県立大学の誇る総合芸術プランナー田村洋教授の学生が、音楽スタジオを備える古刹（こさつ）浄土宗法界寺の辻田昌次住職の協力で「お寺でライブ」という卒論

をまとめたことも思い起こされたのだった。

専福寺の図書館は、改装にともない古い本はだいぶ処分されたよしだが、仏教関係の本が充実していて『島地黙雷全集』『赤松連城資料』などの本を全先生はじめ皆で読みふけり、写真を撮らせていただくことができた。『真宗本派本願寺・台湾開教史』（昭和十年真宗本派本願寺台湾別院出版）という本があり、赤松連城が台湾への開教に行っていたことを知った。

専福寺で開いてみた『島地黙雷全集』全五巻の劈頭の記事は「建議・富山統廃寺問題」であった。明治三年十月二十七日、富山藩は極端な廃仏毀釈として「一派一寺」の命令を発し、一日の猶予しか与えず、不在となった寺を打ち壊し、梵鐘や金銅仏は集めて溶かされた。千三百二十余もあった真宗寺院がもっとも大きな打撃を受けた。翌明治四年に黙雷が発したこの建議や東西本願寺からの抗議によって、五月八日には政府から富山藩にもっと穏当な処置をとるように命令がおりた（村上、二〇二一、一五八頁）。黙雷らの働きの大きさがわかる。

過疎地の寺の存続と発展

富山県の寺院は、一度はこうした困難に出会ったものの、その後復活をとげた。明治二年に藩内の全寺院千六百十六か寺が廃止された薩摩藩などとは事情が違う。現在は、過疎化の進行で存続に困難をきたす例がすくなくない。石川県境に近い、氷見市中田というところに、浄土真宗本願寺派の雲龍山聞乗寺がある。ここは、遊地の高岡市の家によく滞在していた「中田のおばちゃん」の寺で、四十年ぶりの訪問を果たしたのである。英語が達者で、当時子ども達のための英語教室を開いていた坊守の春子さんは、昨年高齢で亡くなられたということで、その娘さんの杉山教子さんのお話をうかがった。

春子さんは、真宗の開教使としてアメリカで活躍した父をもち、現在西本願寺の別院があるサクラメントで生まれ育った。英語が上手だったわけである。嫁に行った先は、大連の開教使だった先代の住職で、そこではシルクロードの大谷探検隊（一九〇二～一九一四）で有名な大谷光瑞元宗主（一八七六～一九四七）が輪番を勤めていた。そのご縁で、ここには光瑞師の書がいくつも残されている。教子さんも、大連で生まれ育ったのである。

田舎の小さな集落にある寺が経済的に自立していくことは難しく、教子さんの夫で現住職の徳成氏は、関東に働きに出て会社員となる。ところが、関東では新興住宅地が広がる中で浄土真宗の大きな空白地帯があることに気付くのである。周到な計画のもと、あらたな「都市開教」を目指すことにし

たお二人は、埼玉県上尾市のアパートの一室での法座からスタートさせた。三十年後、その取り組みは、門徒千三百戸に支えられる四階建ての堂々たる都市型寺院として花開いた。雲龍山聞乗寺という同じ名前をもつ新しい宗教法人を誕生させたお二人は、副住職の息子さん夫妻と分担しながら交代で埼玉県と富山県を往復している。ここには都会の門徒が田舎の寺に来て奉仕し、田舎の門徒と親しく交流するといった、新しい形の地域活性化の姿があり、寺報やホームページも非常に充実している（ネットで聞乗寺を検索）。

続いて訪れたのは、高岡駅の次のJR越中大門駅からほど近い射水市安吉にある浄土真宗本願寺派の布目山常久寺である。ここは、遊地の父である安渓大安（一九一九～二〇〇三）が次男として生まれた寺である。遠慮なく本堂に泊めてもらって、遊地のいとこである住職が病没して十三年、住職代理をつとめてきた安渓喜美子の話を聞いた。家は寺とは無関係であったのに文化的にもかなりの差がある富山県東部の山村から嫁に来て、病弱の夫を支えつつ得度してお勤めもできるようになった。夫である住職を看取り姑を看取ったあと、一時は過労からくる病気に倒れたが、寺を改修した借金を十年以上の歳月をかけて返済し終えた。檀家は昔から増えていないが、このたびのお盆にも百人を超える方々がお寺にお参りに来られた。寺での日曜学校を続けていて、若者達がのびのびと学んでいる。

翌朝は、朗々たるお勤めの声に起こされた。六時半にはラジオ体操をしに、子ども達が境内に集まってきた。保護者の姿も見える。小なりとはいえ、ほぼ女手ひとつでコミュニティの中心としての輝きを保っている寺の姿である。

常久寺の本堂に遊地の祖父の安渓雅亮（一八七六～一九三一）の仏教大学（のちの龍谷大学）の明治三十五年の卒業証書が額に入れてかざってあった。その写真を撮っていた全教授は、ときの綜理（学長）の署名があの赤松連城であったことを発見したのだった。

安吉教団と異安心疑惑

田舎の小さな寺からどのようにして、京都の大学で学ぶ学資が捻出できたのか明らかではないが、安渓雅亮は卒業後北海道などでの開教に従事したという。当初の号は「理庵」。真理追求庵の意味だった。それが学者として現実の壁にぶつかって「狸庵」となり、故郷にもどって住職となってからは、「俚庵」と揮毫するようになった。自分は玉偏でも獣偏でもない、ただの田舎の人であると気付いたのである。そして、むずかしいお経をわかりやすい方言（俚諺）まじりの和歌に直して説いた。昭和の始めにはその数が十万首に達したとい

うのだが、そのうち三千ほどが『仏の声』として昭和三年に出版されている。

理庵が死んで俚庵が誕生した気づきの根幹は「そのまま」であった。香川榮晃の最後の講義の題材でもあった「本願成就文」の俚訳を一例として『仏の声』から新字新かなで引用しておく。原文は総ルビである（安溪雅亮、一九二八、一五九～一六〇頁）。

諸有衆生　いかなる人もことごとく
聞其名号　六字のいわれをよくきけよ
信心歓喜　きけばきこえるすぐとれる
乃至一念　これはこれはの別天地
至心廻向　ああありがたやあら不思議
願生彼国　信ずる一つでおのずから
即得往生　出て行く未来の苦もぬけて
住不退転　ふところずまいの身となるぞ
唯除五逆　鬼のそのままうけとるの
誹謗正法　親の実意をうたがうな
（信巻末、一多証文、改邪鈔、執持鈔、願々鈔、最要鈔等参照）

声にだして読んでいると、「学者と覚者」（同書一四五頁）にあるとおり、

学者　「学者にはわからぬ境地とおっしゃれど、そんなにおっしゃりゃ俺にもわかる。今まではあまりに遠慮ばかりして自分を生かすことを忘れた。これからは自由自在におれの道たれにかまわずどしどしゆこう」

と思えてくるのである。これに対する覚者のことばは、次のように結ばれている。

覚者　「珍しい掘り出しものじゃありがたいようこそそこに気がつきました。道徳やいわゆる宗教などという囚われの型皆脱ぎすてて、真実の自己の生命そのものの欣求に生きる世界に生まれ、今日までの利口な学者が馬鹿になり婆々と一緒に南無阿弥陀仏。大賢は大愚に近し念仏は大賢大愚の落ち合うところ」

大正なかばから昭和のはじめにかけて、常久寺に従来の門徒の範囲を超えた熱烈な信者が集まるようになり、やがて安吉教団と名乗った。高岡の町からも人力車に乗った奥様達が通うようになって、しだいに注目を集めるが、一方で、浄土真宗の教えに外れた異安心の誹謗も受けるようになったという。お経を訳した和歌に自然に節がつき歌となる。熱意あふれる人々のそういう集会を奇異の目で見た人々がいたのだ。

常久寺での説教に集まる人の多さや層の厚さへの嫉妬からか土蔵法門という噂もながされ、なにか怪しい秘め事があるのではないかと疑った新聞記者がいた。本堂の床下にひそん

常久寺・安溪雅亮の講話を聞く安吉教団の篤信家たち

で耳をすましていた彼は、床越しに聞く説教の内容に引き込まれやがて熱心な信者になったという。雅亮の最後の言葉は「聞くだけじゃ」だったというが、「聞くこと」の力を感じさせるエピソードである。最近門徒の方から常久寺に届けられた雅亮の法座風景の写真は、黒板一杯に経文を書いての講話で、ほとんど学校の授業のようにも見える。あるいはその記者による写真かもしれない。当時の熱のあふれる安吉教団のようすは、銀行家から信者となった吉田孫四郎氏の『信仰生活』（吉田、一九二四）でもうかがうことができる。

時代は遡るが、明治十一年五月、島地黙雷は著作の内容について異安心の疑いをかけられている。本山で取り調べにあたったのは、摂津の利井明朗（一八三一～一九一八）、赤松連城、大洲鉄然、香川葆晃の四人の盟友だった（村田、二〇一一、二〇四頁）。これは、後の本山からの長州閥の排除と黙雷の盛岡への移動とつながりがあるできごとだったかもしれない。

香川葆晃と高嶋米峰の誕生寺・真照寺

常久寺での久方ぶりの墓参りを済ませて富山県を離れ、一路新潟県上越市竹直の真照寺へ向かう。香川葆晃の誕生寺である。一面に水田が広がる中に美しい独立峰の米山が横たわる景勝の地に真照寺はある。

高齢の住職の高嶋正士師と奥様が暖かく迎えて下さった。以下は、高嶋師のお話といただいた資料の内容である。

そもそもこの寺は、宇多天皇（八八七～八九六年）から第九代の後胤にさかのぼる真言宗の寺であったが、一向一揆をきっかけに、一五七六（天正四）年に浄土真宗の寺になった。明治はじめにこの寺の住職となっていた高嶋宗明は、米山から

妙高山の間では並ぶ者のない高僧として聞こえていた。そして、葆晃はその弟であった。明治八年、宗明六四歳の時に生まれた初めての男の子がいて、大円と名付けられた。九歳になった明治十六年、本山の巡教使として新潟県に出張してきた弟の葆晃に対して、宗明はこの大円を京都に連れ帰ってりっぱな坊主にしてくれ、と頼んだ。この子が葆晃の家にあずかられて成長し、のちに新仏教運動を展開し東洋大学学長もつとめた高嶋米峰（一八七五～一九四九）となるのである。米峰とは、地元の米山からとった号で大正八年には本名もそれに変えていた。

上越市真照寺本堂

以下、いただいた『高嶋米峰小誌』から抜粋する。

米峰は、京都新町通りの香川葆晃の家から文学寮（後の龍谷大学）に通学していたが、夕方香川家の幼児を抱いて、よく文学寮々舎の門前に来て、そこに集合した大学生たちと歯切れのよい弁舌をもって議論をしていた。……「あのころは実に辛かった！」と後に米峰は自分の青春のみじめさを語ったが、実際京都に移ってからの辛苦は非常なもので、おちおち物を食べたことさえなかった。叔父葆晃の夫人は後韓国統監になった曾禰荒助の姉で非常なやかましい人であったからである。夜勉強していても「大円さん、いつまでもあかりをつけて起きていてはいけません。はやく寝なさい」と厳命する（高嶋、一九七五、六～七頁）。

ここに登場する「非常なやかましい人」というのは、毛利家の武道にたけた「側室ヨネ」であろう。曾禰荒助は、嘉永二（一八四九）年に長州藩家老職の宍戸潤平の三男として生まれ、フランス留学後は日露戦争時の大蔵大臣などを歴任して、一九〇九年から一〇年まで第二代韓国統監（正式名称は

単に「統監」をつとめ、その年病没している。前任は伊藤博文、後任は山口県立大学のある宮野出身の寺内正毅（一八五二～一九一九）だった（井芋、二〇一一、一六四頁）。ヨネが前述のように安政三（一八五六）年生まれであるからには、文中、曾禰荒助の「姉」は「妹」の錯誤であろう。厳命することば「はやく寝なさい」は、おそらく米峰の翻訳で、遊地の母・芙美子（大正十三年当時五歳）の耳に残るヨネ（当時六十八歳）の口癖は「早う、ぎょしなされい」だった。

以下は、芙美子が脳腫瘍でなくなる半年前に書きあげた手記「記憶のあるうちに」の中の祖母ヨネの思い出からの抜粋である。「おやめなされ！　それは人の首を切る時の音じゃ」とヨネが言ったと芙美子は繰り返し語っていた。

祖母の家は毛利の次席家老というものであったらしく、一番心に残ることは次の様な話。或日、祖母が庭に面した小部屋でお習字をしていると、突然庭でバシッという鋭い音が聞こえ、思わず立ち上がり障子を開けてみると、寅次といわれていた中間（ちゅうげん）の首がコロリと庭の苔の上に転がり、父親が刀の抜身を右手に下げ「見るでない！」と怒声をあげたので祖母は驚き一計駆けて台所に行き、泣きながら母に縋りつくと、母親は優しく祖母の背を撫で「理助は打首にされたのであろう」といわれた。お婆様は打たれたのが理助か正衛門か見分ける暇もなく駆け込んだので、母親への返事は出来なかったとの事である。後々の話であるが理助という中間（ちゅうげん）は父の気に入りだったが、幾度も金銭を誤魔化し、その上女中を手当り次第孕ませる悪党だったので、祖母の父の勘気に触れ、打ち首にされたとの事だった。

何故幼い私がそんな話を知っているのか？　と人は不思議に思うだろうが、祖母がいきなりそのような荒っぽい話をする筈もなく、実は泥棒が入った日の翌日の夕方、私は祖母と二人でお風呂に入り、何時もやるように濡れ手拭いの端をもって、水を取る為に力一杯振り下ろしたその音が、祖母に幼いころの手打ちの音を思い出させた事を知り、私はもう二度と、手拭いの端をもって水気を取ることは、止めようと決心したものだった（安渓芙美子、一九九九）。

晩年を葆晃ゆかりの西本願寺の近くで過ごしたヨネはこのあとまもない昭和二年一月二十五日、娘ヒデコにみとられて宇治の五ヶ庄で亡くなり、大谷本廟の勧学谷にある円珠院釈葆晃の墓の近くに眠っている。ヒデコの妹ヒサは、善宗寺ともつながりの深い山口市の浄土真宗本願寺派の円龍寺住職の子孫である讃井家に嫁ぎ、ヒデコの長女晃子は、高嶋米峰の長男と結婚するのであるが、それはまた今回の旅とは別の物語としよう。

真照寺の本堂横の小部屋には、米峰のたくさんの著作を収めた棚があり、同行の全先生は日露戦争の地図や海外向け放送の原稿など「こんな資料みたことがない」と言いながら、実に興味津々でその内容を閲読されたのであった。住職の高嶋正士師は、東京の共立女子大学で心理学の教授をしながら毎週ここに通うという生活を長く続けられたが、現在は真照寺にお住まいで、新潟県内の病院でのホスピスケアなどの仕事をしておられる。代々学者が出る寺なのである。子ども達が東京を離れられないことから、後継者は本山に依頼してよい人にお願いすることになっていると語っておられた。

香川葆晃の墓（大谷本廟勧学谷）

赤倉ホテルと有縁講

真照寺を辞して、私たちは妙高高原の赤倉ホテルに宿をとった。夏は客が少ないらしく宿泊費も安い。翌朝、本館の食堂に行って、私たちは金色に輝く大仏壇がロビーに鎮座していることに一驚した。全先生も「こんどの旅で日本文化は、仏教をその宗派まで知らなければ理解できないことを痛感しました」と手を合わせられた。ホテルにある仏壇の由来を語る本（古海、一九九三）を買い求めて、それが先代社長の母親のショウおばあちゃんの熱意によるものだと知った。ショウさんが報恩講であちこちのお寺にとまってお世話になったことから、そのご恩がえしにとホテルで取り組んでいることがある。このホテルに一泊して親鸞聖人ゆかりの赤倉温泉の掛け流しの湯と最高の料理と真宗各派のお坊さんを招いてのお説教をセットで味わうという報恩講が、昭和三十四年からもう五十年以上つづけられているのだ。毎年スキーシーズン前の十一月には、この有縁講につどう人たちが全国から五千人にものぼるという。東西両本願寺からの感謝状も掲げられ、特定の寺院ではまず不可能な、宗派を超えた交流の縁をひろげていく、あたらしい巡礼の姿がそこにはあった。

小さい時から熱心にお念仏を唱えて九十五歳まで法悦の信

仰生活を続けたショウさんのその姿は、私たちの越の国巡礼のはじめに金沢の西別院でお会いした九十歳のおばあちゃんの姿と重なって見えた。この国に生きてきたごくふつうの人々の信仰にみちた暮らしのひとつの姿がそこにはあった。そして、さまざまな寺院を舞台とするそれぞれに独自の取り組みに触れたことからも、明治十一年に赤松連城がイザベラ・バードに語ったことば「仏教は、復活するかもしれないし、しないかもしれない」へのひとつの希望に満ちた答えを得た気がした。

旅の終わりに、京都西大谷の大谷本廟に詣でて、葆晃、黙雷、連城、鉄然の墓に手を合わせ、お世話になった寺院には、僧月性顕彰会が瀬戸内の小さな酒造所山縣本店と協力してあらたに作った純米吟醸酒「男児志を立て」を今回のすべての物語の始まりとなった月性への追善の気持ちをこめてお送りしたのだった。

謝辞

この巡礼の旅に同行して写真を提供してくださったソウル大学校の全京秀教授、親しく胸襟を開いていろいろのお話を聞かせてくださり、資料を提供してくださった寺院関係者のみなさま、真宗の近代史について懇切にお教えくださっている児玉識先生、葆晃の事績を調べるなら『奇兵隊日記』を読んでみるように示唆してくださった樹下明紀先生に心から感謝申し上げます。また、この連載のきっかけを作ってくださった赤坂憲雄さん、毎回みごとな編集の手腕をみせてくださった大日方公男さんにもお礼を申し上げます。なむあみだぶつ。

引用文献・引用ウェブページ

安渓雅亮、一九二八『仏の声』安吉教団（全文はhttp://ankei.jp/yuji/?n=1586）
安渓芙美子、一九九九「記憶のある裡に―大正時代のある子供の生活」（全文はhttp://ankei.jp/yuji/?n=132）
安渓遊地、二〇〇六「徳地とのご縁を自分史づくりに生かす」『生きた証―足下から見つめ直した徳地』第七章、平成一八年度山口市地域リーダーキャリアアップ講座〈誰でもできる自分史入門〉報告書、とくぢ自分史倶楽部（全文はhttp://ankei.jp/yuji/?n=247）
安渓遊地・安渓貴子、二〇〇九『大学生をムラに呼ぼう―地域づくり実践事例集』みずのわ出版
井竿富雄、二〇一一「宮野の宰相・寺内正毅」山口県立大学国際文化学部編『大学的やまぐちガイド―「歴史と文化」の新視点』一五七～一七三頁、昭和堂
一坂太郎、一九九六「長州征伐をはねのけた人々―徳川氏の支配に痛撃」『江戸時代人づくり風土記　三五、ふるさとの人と知恵　山口』八二～八八頁、農文協
岩田真美、二〇一一「幕末期西本願寺と『仏法護国論』をめぐって―月性「護法意見封事」との相違について」『仏教史学研究』五三（二）、四一～六一頁
香川静蘭、年代不明「政所山善宗寺系図」善宗寺
香川葆晃述、赤松連城序、一八九八『本願成就文講義筆記』

興教書院
奇兵隊日記第九冊　影印　京都大学附属図書館　維新資料画像データベース http://edb.kulib.kyoto-u.ac.jp/exhibit/ishin/kihei/kihei_index_09.html
月性展示館　http://www.city-yanai.jp/siyakusyo/syougaigakusyu/gesshou.html
児玉識、一九七六「維新期長州藩真宗僧の政治的動向」『近世真宗の展開過程』二七五～三〇一頁、吉川弘文館
児玉識、二〇〇五「長州藩上層と真宗――『蓮茎一糸』を中心に」『近世真宗と地域社会』八四～一〇五頁、法蔵館
児玉識、二〇一〇「防長から見た明治維新期における本願寺教団―森竜吉史学の再評価とその批判的継承を目指して」『仏教文化研究所紀要』四九、二四五～二五九頁
司馬遼太郎、一九七六『花神（上中下）』新潮文庫
僧月性顕彰会企画「純米吟醸酒・男児志を立て」山縣本店（0834-25-0048）http://www.oboshi.co.jp/kuramoto/yamagata/
高嶋雄三郎、一九七五『廿七回忌・生誕百年記念　高嶋米峰小誌』著者発行
田中彰監修・田村哲夫校訂、一九九八『定本　奇兵隊日記（下）』マツノ書店
全京秀（Chun Kyung-soo）、二〇〇五「赤松智城の学問世界に関する一考察―京城帝国大学時代を中心に」『韓国朝鮮の文化と社会』四
徳応寺、一九九二『寺史』浄土真宗本願寺派竹園山徳応寺
野口武彦、二〇〇六『長州戦争―幕府瓦解への岐路』中公新書
バード・I、二〇〇八『イザベラ・バードの日本紀行（上下）』講談社
平野武・本多深諦、二〇一一『本願寺法と憲法――本願寺派の寺法・宗制・宗法の歴史と展開』晃洋書房
古海法雲、一九九三『赤倉ホテルのおばあちゃん―越後のショウさん』法蔵館
本願寺山口別院「お寺を訪ねてホームページ版・都濃西組善宗寺」http://www.yamaguchibetsuin.net/
村上護、二〇一一『島地黙雷伝―剣を帯した異端の聖』ミネルヴァ書房
森川地聞、一九七〇『維新百年・傑僧大洲鉄然の生涯』久賀町役場
吉田孫四郎、一九二四『信仰生活』安吉教団（http://ankei.jp/yuji/?n=1605に抜粋）
龍谷大学編、一九二二『真宗大辞彙』冨山房

季刊 東北学　第三十号　二〇一二年一月二十五日　第一刷印刷
発行人――徳山詳直（東北芸術工科大学理事長）
発行所――東北芸術工科大学　東北文化研究センター
山形県山形市上桜田三-四-五　〒九九〇-九五三〇
発売所――柏書房株式会社
東京都文京区本駒込一-一三-一四　〒一一三-〇〇二一

第30号（二〇一二年一月刊）

●座談
震災後の東北の自然と動物——放射能汚染の状況と狩猟の環境をめぐって　佐々木洋平・小原正弘・溝口俊夫・田口洋美
「特集　若者たちの東北—東日本大震災③」
●特集論考・エッセイ・写真
原発震災後に思う白虎隊と会津　川延安直
「勤王」秋田藩の苦悩—秋田藩士高瀬権平とその周辺　天野真志
二本松少年隊の歴史と東北　星亮一
満蒙開拓青少年義勇軍を知っていますか？　後藤和雄
山びこ学校その後—大震災と原発事故にふれながら　佐藤藤三郎
「命てんでんこ」の語り継ぎ—田畑ヨシさんの紙芝居「つなみ」　山崎友子
東北大難献魂見聞録—あなたに体に刻まれた記憶—被災漁村を歩く㊦　鏡ともり
〈東北〉と呼ばれた土地から　川島秀一
波に消えた少年　田附勝
3・11　それから　岩崎孝正
若者たちの3・11—震災に向き合う　田口洋美
香取千暁・阿久津真那・木村真綾・渡邊みなみ・及川葉月・田山雄貴・千尋美紀・神郁江・蝦名裕一監修　白石明香・原田京菜・
●連載
島からのことづて⑥越の国巡礼—幕末維新長州僧の足跡をたどる旅　安渓遊地・安渓貴子
済州島の民俗㉚　伝統農法の東と西—生業民俗論23　高光敏（李恵燕訳）
東シナ海の古層⑩二〇一一年秋　平島再訪—〈平島語字典〉から　稲垣尚友
アジアの風のなかで⑩森の声　木村文
あの頃のこと⑥父　金利恵
●巻頭口絵
写真曼荼羅（新鋭篇⑥）生命のミクロコスモス　山崎裕（内藤正敏編）
●総目次・索引
季刊東北学①～㉚　総目次
季刊東北学①～㉚　執筆者索引
季刊東北学①～㉚　タイトル索引
口絵解説（内藤正敏）・執筆者一覧・編集後記

＊カバーデザインと本文レイアウトは全号を通じて中山銀士。
カバー写真は荒川健一。